



## INTERVIEW

いはこうほ  
**伊波 興穂**

• • •

那覇市出身。大学卒業後、県内の教員として勤務。教員として籍を残したまま参加できる現職参加制度を利用し協力隊へ。帰国後は沖縄盲学校にて勤務。



・派遣国・

**ボリビア**  
Bolivia

・活動分野・

**小学校教諭**



### 運命的な巡り合い

小学校で勤務していた当時、校長からボリビア移民60周年記念に合わせたボリビア旅行の誘いを受けた。ボリビアがどこあるのかさえ分からなかつたが、実際に訪れて衝撃を受けた。「まさか地球の反対側で日本語を話している人たちがいるなんて! 現地のお祭りで、エイサーや旗頭(はたがしら)などもやっていて、すごい場所だな!」とボリビアにある日系移住地のオキナワ市に心を奪っていく伊波さん。滞在中、「沖縄を“母県”と呼び、こんなにも僕を暖かく迎えてくれる方々に何か恩返し出来るものはないか」と考えていたところ、運命とも思えるニュースが飛び込む。沖縄県教育委員会とJICA沖縄の間で

県教員をボリビアへ青年海外協力隊として派遣する協定が結ばれたのだ。もともと海外に興味はあったものの、教員の世界に入り、自分とは無縁だと感じていた協力隊に応募を決意した。

### 一人ひとりにとっての“沖縄”という答えを出すために

「他の隊員と違って、僕は行く場所もどんな人たちがいるのかも、どういうことを求めているのかも知っていたからこそ、逆に期待に応えられるかという不安もありました」。

協力隊として再び訪れたボリビアにあるオキナワ市。日系移住地



の小学校で伊波さんは8年生(日本の中学校2年生)の担任と日本語、幼稚園クラス、体育の授業を担当。日本語の授業では悩みも多く、その中でも学校でしか日本語に触れる機会がない日系3世の生徒たちの“どうして日本語を勉強しなければいけないのか”という声が伊波さんを一番悩ませた。答えの出ない中、伊波さんは“子どもたちがどう感じるか”がポイントだと考え沖縄に行くことを提案。第6回世界ウチナーンチュ大会に生徒17名を引率し帰沖した。

大会期間中、ボリビアの生徒たちを沖縄に住む親戚に会わせたり、県内の学校で交流を行ったり、肌感覚で生徒たちに“沖縄”を触ってもらったり。

伊波さんは大会期間中に生徒たちの日本語の上達も目の当たりにする。「きっかけや活かせる場所があれば、子供たちはこんなにも伸びるんだと。やって良かった、教員をしていて良かったと思った瞬間でした。また、今回の体験を彼らの将来に活かす事が出来れば。沖縄との繋がりや文化の継承についてどう感じるか、どう行動していくか。選択するのは彼らですが、僕は選択肢や、考えたり感じたりするきっかけを与えたかった」と語る。



移住地の歴史について教えている様子



沖縄文化の三線について学んでいる

## きっかけづくりを

帰国後は沖縄県立沖縄盲学校にて勤務。「生徒たちは学び方が違うだけで、学んでいることは多くの子と変わりません。僕自身が教材なんです」と生徒へ自身のボリビアでの経験を伝え

ている。働く上でも変化があり、「ウチナーンチュ大会を含め、ボリビアでの活動は一人では出来ないことばかりでした。以前は一人で物事を解決していましたが、今では周りに協力を頼めるようになりました。そうすることで情報共有だけではなく新しいものも生み出せます。また、異文化の中で活動してきたことで、子供の目線に立って、なぜこう思うのか、行動するのかと意見を聞き、より受け止める事が出来るようになりました」と語る。

今後の目標としては「県内の中高生が海外に行くきっかけはあるが、特別支援の子たちが外に飛び出すチャンスは少ないです。彼らにもそういう機会を作つてやりたいと思います。また、チャンスの時には彼らも自分から一步踏み出す、そのきっかけづくりや選択肢を増やすサポートをしていきたいです。そして、僕自身のように、生徒たちが“もう一度会いたい人”を世界中に作れたら嬉しいです」と笑顔で語った。



ウチナーンチュ大会前夜祭パレードに参加